ここに、帝都の夜を歩く男がいる。ロングコートを羽織り、つばの大きな帽子を深く被り、足元も黒い。黒づくめの身長は一・九mはあった。しかし周囲の視線は集まらない。

当然である。辺りにはこの男以外の何者もいないのだから。

未だ治安の安定しない帝都を歩く男の足取りは花園を歩くような軽やかさである。昨日、無差別銃乱射事件の起こった花屋の前を通り過ぎかけたところで、そこに落ちるひと房の海色の花を目ざとく見つけた。鮮血が未だ残る殺人現場に数枚の紙幣を置き、見つけたそれらを持っていく。紙幣の上には若干の血がついた石を重しとして置いた。花は胸のポケットに刺した。

暗いが静寂の満ちた通りの終わりが見えた時、つまりは通りの先の方でぎゃあぎゃあと騒いでいる連中を見た瞬間、男は非情な目を帽子の下から覗かせた――ような気がした。

明るさの正体は文明の利器ではない。原始たる火の明るさがあった。問題はその燃料だった。燃料は本であり、歴史であり、知識であり、人類の積み重ねだった。少なくとも男にはそう思うほかなかった。

男は外套の中でなにかを強く握る。それは拳だったのかもしれないし、はたまた銃やナイフ、もしかしたら鉈だったのかもしれない。男はその場を急ぎ、炎の周りで飲酒する七人も高身長の黒づくめに声をかけるようなことをしなかった。

また、静寂の中を歩く。

男の足取りは重くなっていた。重しになっているのは、つまるところ過去だった。今はもう過ぎ去ったどうにもならないものが、男の脳内をかき乱し、沈殿した仄暗い感情を再び思い起こさせようとしていた。

男には友人がいた。強かな精神を持つ異性だった。しかしもうこの世にいない。細かな経緯は未だ明らかになっていないが、その異性は本の上に倒れ込む形で燃やされていた。遺体には刺し傷が複数あったが、死因は一酸化炭素中毒だった。人伝いにそれを聞いた時、男は深くため息をついた。

死に様を聞かされた時、男は、彼女は焚書された本を守ろうとして死んだのだと思った。否、真偽はその後も一生明らかにされなかったが、男は老衰で死ぬまでそう確信していた。

重くなった足のまま、男はどうにか進んだ。

進むほどに静寂は深く濃くなった。かつての騒動の中心地に行くほどにそうなった。

足がついに止まる。止まったのは国立図書館の前だった。大きな焦げ跡があるだけで、燃やされた本たちは既に撤去されている。遺体も当然、ない。

男はそこに花を手向ける。

男は墓の場所を知らない。知ろうとも思っていない。

そもそも葬儀がもう行われているかそうかも。

男はしばらくの間、その場に立ち尽くした。意味の無い後悔が頭の中を巡り、それを否定し、また巡る。結論は出ないまま、男は明朝にやっとその場を後にした。